

間投助詞「ネ」の機能と使用条件

Asadayuth CHUSRI

1. はじめに

本稿では、間投助詞⁽¹⁾の「ネ」の基本的な機能を再考察し、間投助詞の使用条件を明らかにする。間投助詞「ネ」は、従来、終助詞「ネ」を分析した先行研究で、関連するものとして取り上げられている。多くの先行研究では、対話資料における間投助詞「ネ」を分析対象としているが、独話資料では、話の相手の反応が限られているという点に対話資料における「ネ」と異なると予想される。そこで、本研究では、独話資料を対象として間投助詞「ネ」の機能を分析し、独話の「ネ」の特徴を解明したい。また、先行研究では、「述べ立て文」⁽²⁾に出現する間投助詞「ネ」だけを取り上げているため、間投助詞「ネ」は「問いかけ文」と「働きかけ文」にも用いられるかどうかについて、日本語母語話者に調査を行った。調査では、間投助詞「ネ」の使用条件と「ネ」と「デスネ」⁽³⁾の使用条件の比較も調べた。独話資料の分析と調査の結果を照らし合わせることで、より使用条件が明らかになると思われる。

2. 間投助詞「ネ」の機能

2.1 先行研究

間投助詞「ネ」を取り上げた研究は、国立国語研究所（以下、「国研」）（1951）⁽⁴⁾、飛田（1969）⁽⁵⁾、伊豆原（1992）、宇佐美（1997）等である。「デスネ」のみ扱ったものは、富樫（2000）⁽⁶⁾、丸山（2002）である。また、山根（2002）は、間投助詞「ネ」をフィラーの一種として捉えて、公演や電話の談話資料を分析している。国研（1951）、飛田（1969）、伊豆原（1992）、富樫（2000）は、間投助詞「ネ」の機能と意味を質的分析している。宇佐美（1997）、丸山（2002）、山根（2002）は、談話資料の間投助詞を量的分析している。

質的な先行研究によると、間投助詞「ネ」の特徴は次のようにまとめられる。まず、間投助詞「ネ」は話し手が発話している間、「発話に注目をする」⁽⁷⁾ものであるという（国研 1951、飛田 1969、伊豆原 1992、宇佐美 1997、富樫 2000、山根 2002）。また、間投助詞「ネ」は「発話を埋める」⁽⁸⁾ものであるという（国研 1951、宇佐美 1997、山根 2002）。さらに、富樫（2000）は、間投助詞「ネ」は「検索処理をモニターする」機能があると指摘している。本研究では、間投助詞「ネ」の機能を聞き手とのコミュニケーションの観点に基づいて考えるため、富樫の心内的な機能は考察しない。また、「話を埋める」機能は本研究では機能に含めない。山根（2002）によると、フィラーの「ネ」には「注目を促す」機能があるといい、「話を埋める」機能は、注目を促した結果の表現効果であると考えられるからである。

「発話に注目をする」機能について、先行研究では、間投助詞「ネ」には「注目」の働きがあると指摘されているが、「注目する主体は話し手なのか聞き手なのか」を調べると、注目する主体の記述されていない研究（国研 1951、飛田 1969）もあるが、聞き手・話し手それぞれを主体としたものがある。伊豆原（1992：164-165）の「話を持ちかけ」、宇佐美（1997）の「注意喚起」、山根（2002）の「注目を促す」は、聞き手を注目させるという機能であり、注目の主体は聞き手となり、本研究では、このような機能を「注目要求」と呼ぶことにする。富樫（2000）は、間投助詞「ネ」は、話し手が発話に注目することを示すもので、「注目表示」と呼んでいるのを踏まえ、本研究でも、このような、話し手が注目の主体となる機能を「注目表示」と呼ぶことにし、独話資料における「注目要求」と「注目表示」の出現傾向を分析する。

2.2 分析方法

独話においては、どのような間投助詞「ネ」を使用するのかを解明するために、国研他（2004）の「日本語話し言葉コーパス」（以下、「CSJ」）の約 10 分程度の模擬講演「S03 あなたの住んでいる町や地域について」（男性 42 例、女性 42 例、約 15 時間 53 分）に出現する間投助詞「ネ」（全 1,398 例）を対象として、その機能を分析した。間投助詞「ネ」が付加された文節に対してあいづちや頷きなどの反応がある場合は、「①注目要求」の機能、反応のない場合は「②注目表示」の機能になり、また、いずれも解釈できる場合は、機能が「③重複の場合」と判断した。

2.3 分析結果

表 1 独話資料における間投助詞「ネ」の機能別

「ネ」の機能	①注目要求	②注目表示	③重複の場合	計
(実数 (%))	1,387 (99.21)	1 (0.07)	10 (0.72)	1,398 (100.00)

表 1 では、独話資料における間投助詞「ネ」1,398 例中 1,387 例（99.21%）は「注目要求」の機能を持っていることが分かる。また、「何に注目させるか」を分析すると、例（1）のような「『ネ』の付く当該発話の情報への注目」と例（2）のような「後続発話の情報への注目」に二分できる。

- (1) 261 手賀沼っていうね₄₃、あの、
 262 ま、柏ではないんですけれどもね₄₃、それは我孫子なんですけれどもね₄₃、
 263 あのー、手賀沼、
 264 っていう沼があったりですね₄₃。そこにはもう、
 265-267 本当に、昔は、日本一汚い沼だって言われたんですけれども、

(S03F0731 : 261-267) ⁽⁹⁾

- (2) 88 え、南大沢という駅まで行って、
 89 あ一の、そこで買い物をするか、もしくは、その、
 90 橋本ですね⁴⁴。あの、さま、相模原市の方に入ってって買い物するか、
 91 あの、どっちかというような生活をしています。
 92 <雑音>
 93 で、それでですね⁴⁴、じゃ一駅行けば、その隣りは発展しているのか、
 94 と言うと、実はそうでもなくて、 (S03F0132:88-94)

例 (2) の発話 93 の「ネ」は、先行発話からどのように展開するのかということを予告する接続表現に後続するため、次の発話がどのように展開するのか、聞き手に注目を要求するのである。また、例 (3) のように、「えーと」、「あの一」、「なんか」のようなフィラーに後続する「ネ」も、接続表現に後続するものと同じ効果があると考えられる。

- (3) 190 後、
 191 えーとですね⁴⁴、んー
 192 まー、あの一、
 193 ま、学、えー、
 194 小学生がですね⁴⁴、あの一、
 195-200 うん、六年生を先頭にして、学校まで、一緒に、あの、通学するんですけども、 (S03F0156:190-200)

間投助詞「ネ」は、リズムやイントネーション、ポーズによって、「注目要求」の程度が強まったり、弱まったりする。例えば、平板イントネーションで、後続発話との間のポーズが非常に短い場合は、その間投助詞「ネ」は、聞き手には、注目を要求する態度が伝わらず、話し手の「フィラー」か「癖」として捉えられてしまう。しかし、聞き手にも個人差があるため、ある聞き手に「フィラー」と捉えられた「ネ」でも、別の聞き手にとっては「注目要求」していると捉えられることもある。

本研究では、「注目表示」が1例ある (例 (4))。

- (4) 95-97 欲しいものが全部中古で手に入るという、え、とてもありがたい、
 98 えー、ところです。
 99 えーっと、
 100 まですね³³、えと一、
 101 ですが、江古田のメーンはですね⁴⁴、
 102 あの一、駅の方から、
 103 環七まで、
 104 えーっと、まっすぐに続いている商店街があるんですけども、 (S03M0138:95-104)

例(4)の発話98の前は「中古屋」の話であるが、発話101から新しい「江古田のメイン」の話を始めるため、発話99-100では、話題を考えているところだということが分かる。また、「マア」は、「アノー」のようなフィラーとは異なり、次の発話内容に注目させるのではなく、考えたことを保留する状態を表すものなので、「ネ」は話し手が話題探しに注目していることを表示すると捉えられる。

3. 間投助詞「ネ」の使用条件

3.1 分析方法

丸山(2002)は、NHK総合テレビの番組「あすを読む」のシンポジウムの談話資料を用いて、「間投用法」と「文末用法」の「デスネ」を分析している。本研究の間投助詞「ネ」に相当する「間投用法」の「デスネ」の出現位置に関して、助詞「ハ」(26.3%)、助詞「テ」(10.0%)、助詞「ニ」(7.3%)の順に多く「ネ」と共起するという。しかし、本研究では、助詞「テ」や助詞「ニ」などは様々な文節の種類に現れるため、出現位置をより詳しく調べるために、文節の種類(以下、「文節類」⁽¹⁰⁾)によって出現位置を考察する。

3.2 分析結果：出現位置

独話資料で使用されている「ネ」の出現位置を調べ、出現率を出した。

表2 独話における助詞「ネ」の出現位置別の出現率

順位	出現位置 (文節類)	「ネ」の全体(実数(%))	性別(実例(%))		機能別(実数(%))		
			男性	女性	①注目要求	②注目表示	③重複の場合
1	連用節	435 (31.12)	375 (26.82)	60 (4.29)	435 (31.12)	—	—
	B類	233 (16.67)	216 (15.45)	17 (1.22)	233 (16.67)	—	—
	C類	181 (12.95)	139 (9.94)	42 (3.00)	181 (12.95)	—	—
	A類	21 (1.50)	20 (1.43)	1 (0.07)	21 (1.50)	—	—
2	補語句	295 (21.10)	262 (18.74)	33 (2.36)	292 (20.89)	—	3 (0.21)
3	主題句	237 (16.95)	204 (14.59)	33 (2.36)	235 (16.81)	—	2 (0.14)
4	主語句	129 (9.23)	119 (8.51)	10 (0.72)	129 (9.23)	—	—
5	連用句	129 (9.23)	111 (7.94)	18 (1.29)	127 (9.08)	—	2 (0.14)
6	接続句	65 (4.65)	53 (3.79)	12 (0.86)	64 (4.58)	—	1 (0.07)
7	連体句	52 (3.72)	48 (3.43)	4 (0.29)	51 (3.65)	—	1 (0.07)
8	フィラー句	29 (2.07)	19 (1.36)	10 (0.72)	28 (2.00)	1 (0.07)	—
9	連体節	15 (1.07)	9 (0.64)	6 (0.43)	15 (1.07)	—	—
10	引用節	10 (0.72)	7 (0.50)	3 (0.21)	10 (0.72)	—	—
11	文節の中	2 (0.14)	2 (0.14)	0 (0.00)	1 (0.07)	—	1 (0.07)
計		1,398 (100.00)	1,209 (86.48)	189 (13.52)	1,387 (99.21)	1 (0.07)	10 (0.72)

表2によると、独話の間投助詞「ネ」は、連用節(31.12%)、補語句(21.10%)、主題句(16.95%)、主語句(9.23%)の順に出現している。一方、連体句(3.72%)、連体節(1.07%)

にはあまり出現していない。

3.3 分析結果：使用頻度

性別による終助詞「ネ」の使用頻度についての先行研究はある⁽¹¹⁾が、間投助詞「ネ」についての先行研究はない。今回の分析の結果、間投助詞「ネ」を使用しない人が、男性 42 名中 7 名、女性 42 名中 24 名いる。女性では、間投助詞「ネ」を 20 例以上使用した人が 1 名（57 例）おり、男性では、17 名である。男性のうち 6 名は 50～99 例使用しており、3 名は 100 例以上使用している。女性の 1 人当たりの平均使用数は約 5 例で、男性は約 29 例である。つまり、独話では、男性の方が女性より間投助詞「ネ」を多く使用していることになる。対話においても同様の傾向があるかどうかは、今後の課題である。

4. 間投助詞「ネ」に関する意識調査

先行研究の対話資料と本研究の独話資料の用例のみでは分析が難しい、「問いかけ文」、「働きかけ文」における間投助詞「ネ」の出現の可能性、出現しやすい位置と出現しにくい位置の条件を解明するために、アンケート調査を実施した。

4.1 調査方法

先行研究の対話資料と本研究の独話資料には、「述べ立て文」に出現している間投助詞「ネ」の例しか見られなかった。そのため、「問いかけ文」、「働きかけ文」の中でも、間投助詞「ネ」が使用できるか否かという課題が残った。また、間投助詞「ネ」の出現位置についても、文節類以外に、間投助詞「ネ」が挿入される箇所の条件があるのか否かという問題もある。ここでは、文の種類と出現位置の使用条件に関するアンケート調査を実施した。調査は、日本語母語話者計 112 名（男性 41 名、女性 67 名、性別無記入 4 名）を対象に行い、32 回答項目の間投助詞「ネ」の用例について、適切（○）、不適切（×）、よく分からない（△）の 3 つに評価してもらった。

回答項目 1a～11b には問いかけ文、項目 12a、12b は間接的な依頼の述べ立て文、項目 13a～16c には働きかけ文を配置した。問いかけ文の項目の中で、項目 1a～5b には情報と意向を質問する問いかけ文、項目 6a～11b には確認要求の問いかけ文を含めた。働きかけ文の項目のうち、項目 13a、13b には誘いかけ文、項目 14a～16c には、命令文を入れた。さらに、「ネ」の出現位置の傾向調査、「ネ」と「デスネ」との比較も行った。また、同種の文で対となる項目に、a、b、c の下位分類を付した。

データの「加重平均値」⁽¹²⁾（以下、「WA 値」）を計算し、集計結果を表 3 にまとめた。その際、「×」の重みづけ（weight）を 3、「△」の重みづけを 2、「○」の重みづけを 1 とした。なお、回答のない場合は、「無」の欄に記入し、重みづけを 0 とした。加重平均の方式で加重平均値を算出し、数値が中央値（37.3 点）より高い場合（「▲」と記す）は、その間投助詞

「ネ」の使用は不適切であり、数値が中央値より低い場合（「▽」と記す）は、その使用は適切だと見なした。なお、加重平均値が 37 点になれば、中央値に近いと見なし、「□」を記す。

表 3 調査結果の加重平均値

項目	文	○	△	×	無	WA 値		
1	a	ラクダの種類ってね、何種類に分けられる？	40	23	49	0	39	▲
	b	ラクダの種類はですね、何種類に分けられますか？	31	25	56	0	42	▲
2	a	成田に着いたらね、どうやって東京に行きますか？	42	25	45	0	38	▲
	b	日本茶と言えね、何種類ある？	22	21	69	0	45	▲
	c	日本茶と言えですね、何種類ありますか？	23	25	63	1	44	▲
3		明日の授業についてですね、交代していただけますか？	8	18	86	0	50	▲
4		『不思議の国のアリス』を書いた人はですね、ルイス・キャロルですか？	18	21	73	0	47	▲
5	a	「蝶々婦人」を見る前にね、日本文化を知らなくてもいいですか？	41	31	40	0	37	□
	b	「蝶々婦人」を見る前に、日本文化をね、知らなくてもいいですか？	28	35	48	1	40	▲
6	a	チャンプルーを作る時にね、豆腐を入れなくて、この素だけ入れてもいいんですか？	68	17	27	0	31	▽
	b	チャンプルーを作る時に、豆腐を入れなくてね、この素だけ入れてもいいんですか？	43	23	44	2	37	□
	c	チャンプルーを作る時に、豆腐を入れなくて、この素だけ入れてもね、いいんですか？	16	28	67	1	46	▲
7	a	メドゥザをね、倒した勇者の名前は、アキレスでしたっけ。	46	26	40	0	36	▽
	b	メドゥザを倒した勇者の名前はね、アキレスでしたっけ。	38	23	51	0	40	▲
8	a	右に曲がるとね、左側のビルはララホテルですね？	24	18	70	0	45	▲
	b	右に曲がると、左側のビルはね、ララホテルですね？	20	26	66	0	45	▲
9	a	青ハバイヤをね、料理に使う地方もあるよね？	63	22	27	0	31	▽
	b	青ハバイヤを、料理に使う地方もね、あるよね？	35	27	50	0	40	▲
10		バーミヤンという市名はね、中央アジアにあるでしょう？	60	22	30	0	32	▽
11	a	日本の仏像はね、ギリシャの神像の作り方をまねしたんじゃない？	63	19	28	2	31	▽
	b	日本の仏像はですね、ギリシャの神像の作り方をまねしたんじゃないですか？	65	19	27	1	31	▽
12	a	今回の試合のマネージャーはね、あなたに担当してもらいたいんだよ。いいか？	86	12	14	0	25	▽
	b	今回の試合のマネージャーはですね、あなたに担当してもらいたいんですが、	62	20	30	0	32	▽
13	a	ハイキングの後はね、A 駅で特急に乗って帰りましょう。	58	23	31	0	33	▽
	b	ハイキングの後、A 駅でね、特急に乗って帰りましょう。	45	32	35	0	36	▽
14	a	この本はね、湿気に弱いから、外に持っていかないで。	98	8	6	0	22	▽
	b	この本はね、湿気に弱いからね、外に持っていかないで。	70	19	23	0	30	▽
15	a	この本は湿気に弱いからね、外に持っていかないでね。	91	7	12	2	24	▽
	b	この本は湿気に弱いからね、外に持っていかないで。	88	9	15	0	25	▽
16	a	文の書き方が分からなければね、先輩に聞きながら書いて、私のところに出してください。	74	19	19	0	28	▽
	b	文の書き方が分からなければ、先輩に聞きながら書いてね、私のところに出してください。	41	25	46	0	38	▲
	c	文の書き方が分からなければ、先輩に聞きながら書いて、私のところにね、出してください。	41	31	40	0	37	□

4.2 文の種類による出現傾向

問かけ文は 21 項目中 13 項目 (61.90%) の WA 値が中央値より高いため、不適切な文となる傾向が大きく、働きかけ文は 9 項目中 1 項目 (11.11%) のみの WA 値が中央値より高いので、不適切な文になる傾向が小さいと見なした。調査結果から、間投助詞「ネ」は問かけ文に出現しにくく、働きかけ文に出現しやすいという傾向があると言える。また、問かけ文の中で、情報・意向を質問する問かけ文 9 項目中 8 項目 (88.89%) が不適切で、確認要求の問かけ文は、12 項目中 5 項目 (41.67%) が不適切と評価されているため、問かけ文には間投助詞「ネ」が出現しにくいのではないかと考えられる。

4.3 文中の位置による出現傾向

次に、回答項目 5~9、13~14、16 の計 8 組 (18 項目) における間投助詞「ネ」の位置を比較した。各組には a と b⁽¹³⁾ の項目があるが、a は、b より述語句から遠い位置に間投助詞「ネ」が付く文である。調査結果から、a 項目よりも b 項目の間投助詞「ネ」の方が不適切と感じる回答者が多かった。

CSJ 資料の分析から、間投助詞「ネ」は、補語句や主題句と共起しやすいが、連体節の中の句とは共起しにくいことが分かっている。例 (5) の項目 7 では、連体節の補語句 (7a) の方が主題句 (7b) よりも適切だとされている。これは、7a の連体節の補語句の方が 7b の主題句より述語句から遠いところに間投助詞「ネ」が付いているのではないと思われる。

(5) 項目 7a メドゥザをね、倒した勇者の名前は、アキレスでしたっけ。(WA 値=36)

項目 7b メドゥザを倒した勇者の名前はね、アキレスでしたっけ。(WA 値=40)

また、例 (6) の項目 2a と項目 2b では、両方の「ネ」が連用節 (B 類) に付くが、間投助詞「ネ」と述語の間の文節数が異なる。項目 2a の方が「ネ」から述語句までの文節が多くて、より複雑な文構造であることから、不適切と感じられる程度が低いのではないと思われる。

(6) 項目 2a 成田に / 着いたらね、 / どうやって / 東京に / 行きますか？ (WA 値=38)

項目 2b 日本茶と言えばね、 / 何種類 / ある？ (WA 値=45)

以上の調査結果から、述語から離れた文節には間投助詞「ネ」が付きやすく、述語に近い文節には付きにくいという傾向があることが分かった⁽¹⁴⁾。

4.4 「ネ」と「デスネ」の比較

学習者の「ネ」の使用を考察した柴原 (2002: 28) は、「ことばに詰まって使う『ね』は、敬体『です』をつけないと、『なれなれしい、子供っぽい』印象になってしまうので、今後来日時の OPI でそのような例が見られたら、早い時点での指導が必要であろう。」と述べている。このことから考えると、改まり度の高い「デスネ」の方が「ネ」ほどはなれなれしく感じさせないため、「ネ」よりも先に指導する方が良いように思う。「デスネ」の使用は、どんな文でも問題がないのかを調べるために、「ネ」と「デスネ」の使用条件について比較する項

目 1～2 と項目 11～12 の a、b を含めた。その結果、項目 2 (2b 対 2c)、項目 11 では、「ネ」と「デスネ」の評価の差があまりないが、項目 1、項目 12 では、「デスネ」の方が「ネ」よりも不適切と評価されている。この結果から、「デスネ」の使用も全く問題がないとは言い切れないことが分かった。「ネ」も「デスネ」も、発話内容や場面に応じて用いないと、不適切になる可能性がある。

5. おわりに

5.1 分析結果のまとめ

間投助詞「ネ」の機能は、以下の通りである。

- ①「注目をする」機能を、注目する主体により、「注目要求」と「注目表示」に二分した。
- ②基本的には、間投助詞「ネ」に働きかけがあるため、「注目要求」の機能を持っており、さらに「注目要求」の対象によって、『ネ』の付く当該発話への注目要求」と「後続発話への注目要求」に二分される。
- ③フィルターの「マア」と共起する間投助詞「ネ」は、「注目表示」の機能を持つ。
- ④「ネ」の後のポーズやイントネーションにより、ただのフィルターや話し手の癖と見なされるものもある。したがって、間投助詞「ネ」の効果的に使用するためには、「ネ」の後のポーズやイントネーションの型などを指導する必要がある。

「ネ」の出現位置については、連用節、主語、主題、補語とは共起しやすい。アンケート調査の結果、述語句からより離れた文節の方が「ネ」と共起しやすい傾向があった。以上の 4 種の文節と共起しやすいことと、述語句からより離れた文節の方が「ネ」と出現しやすいことは、間投助詞「ネ」を指導する際の有益な情報となるであろう。さらに、「ネ」の使用の方が「デスネ」よりも適切な場合もあるので、「デスネ」だけではなく「ネ」も指導する必要がある。

最後に、性差による使用条件については、独話の場合は、男性の方が女性よりも頻繁に使用するという傾向が認められた。

5.2 今後の課題

本稿では、各発話に付加する間投助詞「ネ」の機能を明らかにしたが、今後、談話全体における間投助詞「ネ」の機能を解明することによって、「ネ」の機能をより効率よく指導できるであろう。その一例を挙げれば、間投助詞「ネ」が主題句と共起する傾向があることから、間投助詞「ネ」には話題を提示する働きもある可能性がある。また、使用条件について、間投助詞「ネ」の出現は「述語句からより離れた文節の方が出現しやすい」という条件以外に、他の条件があるのかは今後の課題として考察する必要がある。

また、日本語教育⁽¹⁵⁾において、学習者の母語に間投助詞「ネ」のような要素があるかど

うか、それが間投助詞「ネ」の指導にどのような影響を及ぼすのかについても調べる必要がある。例えば、タイ語には、間投助詞「ネ」と似た間投助詞 [ná] ⁽¹⁶⁾ があるため、[ná] と直訳できると指導すれば、両方の間投助詞は機能が似ている ⁽¹⁷⁾ ため、効率の良い指導をすることができるだろうが、出現位置 ⁽¹⁸⁾ や性差、改まり度の差 ⁽¹⁹⁾ もあるため、母語干渉の問題があることが予想される。こうした対照研究は今後の課題としたい。

注

- (1) 「間投助詞」は「文節の終に来るもの」である（橋本 1934）。また、「間投的用法の終助詞」と呼ばれる場合もある（益岡・田窪 1992）。現代日本語の間投助詞は、「ネ」のほか「サ」、「ヨ」がある。
- (2) 本稿で扱う文の種類は、仁田（1991）の文の種類（「働きかけ文」、「述べ立て文」、「表出文」、「問いかけ文」）に基づく。ただし、「表出文」は「述べ立て文」と似ているため、「述べ立て文」に含めて扱う。
- (3) 本稿では、間投助詞の「デスネ」を間投助詞「ネ」の丁寧体とする。
- (4) 国研（1951：155）は、間投助詞の「ネ」は「語勢を添える。または、単なる声のつながりのためにさしはさむ。」とある。
- (5) 飛田（1969：702-703）は、間投助詞の「ネ」は「（前略）話し手の聞き手に対する待遇からみると『親密の意』を表し、心理的な面からみると『自己と聴者との了解の共鳴又はその予想を表す詞。』であり、話し手の行動の立場からいえば、『念を推して話しかける』のに用いることばである。」とある。
- (6) 富樫（2000）は、非文末の「デスネ」の機能は「心内での検索処理をモニターする」が、「デスネ」を使用する際には、『「デスネ」が付加された情報への注目を集める、言ってみれば、『注目表示』という語用論的な効果がある』と指摘している。
- (7) 国研（1951：155）の「語勢を添える」、飛田（1969：702-703）の「念を推して話しかける」、伊豆原（1992：165）の「話を持ちかけ」、宇佐美（1997：250）の「注意喚起」、富樫（2000：87）の「注目を集める」、「注目表示」、山根（2002：70）の「聴衆に注目を促し」を「発話に注目をする」働きにまとめた。
- (8) 国研（1951：155）の「声のつながりのためにさしはさむ」、宇佐美（1997：253）の「発話埋め合わせ」、山根（2002：70）の「フィラー」の解釈を「発話を埋める」働きにまとめた。
- (9) 発話内容の前の数字は、CSJの「転記単位」の通し番号である。本稿では、「転記単位」を「発話」としている。また、「ね」の下付けの番号は執筆者が判断したイントネーション型である。「43」型は下降イントネーション、「44」型は上昇イントネーション、

「33」型は平板イントネーションである。また、「444」型はより伸びている上昇イントネーションである。

(10) 文節類は、チューシー (2005) が分類したものである。「述語句」「主語句」「補語句」「連用句」「連体句」「引用節」「連用節」「連体節」「主題句」「接続句」「感動句」「フイラー句」「あいづち句」「誤り」「その他」(笑い、咳等)、「文節の途中」という 16 種とした。なお、連用節に関しては、南 (1993) の従属句の分類に基づき、A 類、B 類、C 類の 3 種に分類する。

(11) 宇佐美 (1997:258) は、女性の対話における「ネ」の使用頻度が高いと述べている。石田 (2005 : 7) は、女子学生と男子学生の終助詞使用頻度を比較し、女子 (21%) の方が男子 (19%) よりも多く使用しているという。

(12) 加重平均値の方程式

$$\frac{\sum_{i=1}^n w_i x_i}{\sum_{i=1}^n w_i}$$

(13) c の項目もある場合は、c 項目の間投助詞の位置は、a と b より述語句に近い。調査結果では、c の方が b と a よりも不適切な傾向があった。

(14) ただし、項目 16b と 16c の調査結果は、述語句との距離の条件と少し矛盾する。これについては、今後の課題としたい。

(15) 日本語教育では、間投助詞「ネ」の用法や、使用条件があまり紹介されていないのが現状である。間投助詞「ネ」は何のために使用されているかを解説しているものは、『なめらか日本語』(1997 : 103)、『新日本語の中級 文法解説書英語版』(2002 : 38) である。『なめらか日本語』には、「相手の反応を確かめながら会話を進めるために、ひとまとまりの言葉の後に『ね』などの語を入れます。またこれは日本語のリズムをとるためでもあります。ただし、あまりたくさん入れすぎるといい印象を与えませんから、注意してください。(後略)」、『新日本語の中級』には、間投助詞「ネ」は「注目引きつけ」(to draw the attention of the other person) と、機能のみが記されている。

(16) タイ語の間投助詞は、[ná]、[nà]、[nía]、[sì] がある。しかし、[nà]、[nía] と [sì] は「提題助詞」で、主題句にしか出現しないので、日本語の「ネ」、「サ」、「ヨ」と同じように、どの位置にも後続することが可能なのは、[ná] だけである。

(17) Booppanimit (1996 : 121-123) は、文中の [ná] は「相手に注目を要求する働きをする」と指摘している。

(18) タイ語の文法では目的語は述語句の近くにあるという規則がある。以下の例のように、「タクシーにね、乗って」や「傘をね、忘れた」のように使用できないため、タイ人学習者はこのような「ニ」格、「ヲ」格に間投助詞「ネ」をあまり入れないと予測でき

る。

日本語：昨日ね、私ね、タクシーにね、乗ってね、でね、タクシーでね、傘をね、忘れたの。

タイ語：เมื่อวานนี้ ฉัน ขึ้น (*นะ) แท็กซี่ หลังจากนั้น ก็ ลืม (*นะ) ร่ม ไว้ในแท็กซี่

múawaanniná chánná khúin (*ná) thékssiná lǎŋcàaknánná kô luum(*ná) rômná wái nai thékssi

昨日 私 乗る タクシー で 忘れる 傘 おく 中 タクシー

(19) [ná]は、日本語の「デスネ」と同様、「丁寧さの助詞」と共起する形式 (ná-khráp/ná-khá) もある。[ná]、または[ná-khráp] (男性用)、または [ná-khá] (女性用) の使い分けは、改まり度によるが、混用する場合もある。また、日本語の間投助詞の「サ」、「ヨ」に相当する[ná]もある。日本文化では、初対面では場の改まり度が高いため、「デスネ」を用いる方が適切だが、タイでは、初対面では、[ná-khráp/ná-khá] だけでなく、[ná]の使用も適切だと見なされる場合もある。このような違いは、文化の背景の問題にも係わるので、ポライトネスに係わる間投助詞「ネ」と[ná]の対照は今後の大きな課題である。

参考文献

- 石田敏子 (2005) 「中・高校生の会話管理—『話し合い』における終助詞運用の観点から」『国文目白』44号、日本女子大学国語国文学会、6-16
- 伊豆原英子 (1992) 『『ね』のコミュニケーション機能』『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会、159-172
- 宇佐美まゆみ (1997) 『『ね』のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス』『女性のことば・職場編』ひつじ書房、241-268
- 国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞：用法と実例』秀英出版
- 柴原智代 (2002) 『『ね』の習得—2000/2001 長期研修 OPI データの分析—』『日本語国際センター紀要』12号、国際交流基金日本語国際センター、19-34
- チューシー・アサダーユット (2005) 『日本語の独話資料における助詞『ネ』の談話展開機能』早稲田大学日本語教育研究科修士論文 (未公開)
- 富樫純一 (2000) 「非文末『ですね』の談話語用論的機能—心内の情報処理の観点から—」『筑波日本語研究』5、筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室、70-91
- 飛田良文 (1969) 「ね (ねえ) <現代語>」松村明編『古典語現代語助詞・助動詞詳説』學燈社、701-704
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 橋本進吉 (1934) 『国語法要説』明治書院
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版

丸山岳彦 (2002) 「話しことばコーパスに現れる『ですね』の分析」『さわらび』11、神戸市
外国語大学外国語学部、39-48

南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版

Booppanimit, Watcharapon (1996) “DISCOURSE MARKERS IN CASUAL CONVERSATIONS OF
BANGKOK THAI SPEAKERS” (Thesis) Department of Linguistics, Chulalongkorn University

資料の出典

「日本語話し言葉コーパス」(模擬講演「S03」) 国立国語研究所・情報通信研究機構 (2004)

『新日本語の中級 文法解説書英語版』(2002) 財団法人海外技術者研修協会、スリーエーネ
ットワーク

『なめらか日本語会話』(1997) 富坂容子著、アルク